

荒戸城跡(歴史背景)

この城は、越後国（えちごのくに）（現在の新潟県）の侍領主で、16世紀に最も大きな力を持った大名の1人である上杉謙信（うえすぎけんしん）（1530～1578）の遺産の一部である。上杉家の家臣となるべく生まれた謙信はのちに正式に上杉家の養子となり、管領と呼ばれる非常に権威ある職を与えられた。成人後は武将兼統治者として立身出世を遂げ、「越後の虎」として知られるようになった。この城は、彼の死後、2人の後継者による跡目争いの最中に建てられたものである。

1569年、謙信は南の北条（ほうじょう）家と同盟を結ぶ。同盟は養子縁組や異なる氏族間の結婚によって強化されることが多く、謙信も北条家の息子の1人を養子として迎え、その子を景虎（かげとら）（1554～1579）と名付けた。さらに自身の甥も養子に迎え、景勝（かげかつ）（1556～1623）と名付けた。1578年3月、謙信が後継者を指名することなく急死すると、上杉家の跡目をめぐってこの2人の息子がライバルとなった。

北条家の後ろ盾がある景虎は圧倒的な攻撃によりたやすく権力を握れる状況にあったため、景勝は迅速な行動に迫られた。北条家が西から攻撃してくるおそれがあったことから、同年6月、景勝は三国（みくに）街道を守るため、荒戸城（あらとじょう）を直ちに建設するよう命じる。城はわずか3か月で完成したが、大軍勢による圧倒的な景虎軍の攻撃を受けて景勝は退却。一帯は北条家の支配下となった。しかし、その翌年の2月、景勝は景虎が拠点築いていた御館（おたて）に反撃をしかけ、わずか1日で城を奪還する。景虎は逃亡するも、景勝の勝利が決定的となったことを受けて後に自害する。こうして景勝が上杉家当主および越後大名となった。

1598年、景勝の会津（あいづ）藩（現在の福島県に位置する）転封の際に荒戸城は廃城となった。城跡は1950年代に地元の林業労働者によって発見され、1976年に新潟県の文化財に指定された。